

2010年 **GNOBLE** 4期生 東大理系 合格者ロングインタビュー

井本 遥	(いもと はるか)	麻布→東大理 I
緒方 優	(おがた ゆう)	開成→東大理 III
島田 工	(しまだ たくみ)	筑駒→東大理 I
西方 宏太郎	(にしかた こうたろう)	開成→東大理 III

Q : 今一番やりたいことは？

井本：友達と遊びたいですね。
受験のときは遊びを結構削ってましたから。カラオケで歌いまくるとか、馬鹿騒ぎを思いきりしたいと思います。



緒方：僕は受験勉強で応援してくれた人たちにお礼を言いたいと考えています。仮面（国立大医学部在籍）をしていたので、いろんな人に心配や迷惑をかけてしまったんです。まわりの友だちも僕が理IIIを目指しているのを知って、がんばれって応援してくれていたんです。支え



てくれた人たちにみんなにお礼を言いたいと思います。もちろんカラオケも行きたいですけどね（笑）。

島田：やっぱりゲームですね…、
というかすでにやってる
んですけど（笑）。

緒方：うん。ゲームは封印だ
ったよね。

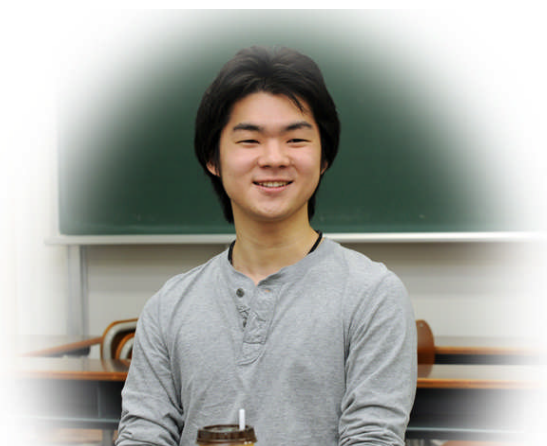
井本：そう。やり始めちゃうと際限がないんで。

西方：僕も、緒方くんと同じようにまずは支えて
くれた人にお礼をしたいです。これからは自
分のことだけじゃなくて、まわりの人のこと
も考えられるように自覚を持てればと。

それ以外具体的には「これをやりたい」と思
えるようなことはまだ思いつきません。僕の
場合、ゲームは旧世代のP S 2でとまってる
んで（笑）。



むしろ、これからの生活にワ
クワクしているというか、ど
んな大学生活が始まるのか楽
しみです。



Q : 東大で、どんな大学生活を送りたい？

西方：正直まだわからないけど、サークルも楽しそうだし、勉強も楽しみだし…でも、以前理Ⅲに入った先輩から聞いたことなんですけど、東大合格までにはたくさん支えてもらってきたわけだから、これからは親やまわりの人に何か恩返しをしていかなきゃならないんだと。そのためには自分の力を高めなくては、と実感しているところがありますね。

緒方：その点は僕も同じ気持ちです。それから、わずか1年とはいえ人より長く受験勉強をやっているので、自分が経験したことを活かして次に続く人に何か伝えることができたらいいなと。グノーブルにも1年余分に通ったし、まさに塾の先生みたいなことをやってみたいなと思っています。

井本：そういうのを聞くとやっぱりカラオケで歌ってる場合じゃないな(笑)。僕も高校時代にずいぶん親に心配かけたんで。

緒方：いやいや、現役で入っているのは親孝行だよ(笑)。

Q : 東大を目指したのは？

井本：高2の夏に東大理Ⅰをはっきり意識して本格的に受験勉強を始めました。まわりと比べて成績がよくなかったので人より少し早くスタートしたんです。また東大を目指した理由は、目標は高く持っていたということと、将来は航空関係の仕事につきたいので、東大の宇宙航空学科に入りたいという具体的な目的があって東大を目指しました。

緒方：東大に行きたいと漠然と思ったのは中1。学校が開成だったので、それも必然だったと思うんです。理Ⅲを意識し始めたのは、高1の時に行ったオープンキャンパスからです。これが、本当に偶然なんですけど、最初は工学部を見るつもりで行ったら、そこが遠くて、まずは近くの医学部を見たんです。その瞬間から、「東大へ行きたい」という気持ちと、自分の職業として「医療に携わりたい」という気持ちが共存し始めたんです。でも現実的に理Ⅲにチャレンジしたいと思ったのは高3に入ってからだったから、ちょっと遅かったん

です。

西方：僕も開成なんですけど、もともと京都出身なんで、緒方くんが中学に入ってすぐ東大を意識したってのには驚きました。開成＝東大という図式は僕の頭の中にはまったくありませんでした。僕の場合、中3になってようやく東大が頭にちらついてきたかなという感じなんです。でもその時も医者道と弁護士道、将来の仕事について2つの選択肢があって、どちらかというとならば弁護士道の方に強くひかれていたんです。

それから、高校の先輩で、理Ⅲに行っている人と話す機会があって「ああ、理Ⅲってすごいな」とその人の人柄や考え方に惹かれて、それが高1のころです。それでも自分の中では自分が東大を受けるという実感はなく憧れレベルでしたね。

島田：筑駒にも東大目指すのが当たり前という空気がありましたから、高校受験で筑駒に合格したときから東大を意識することになりました。学校内でも志望校を聞く場合は東大は当

たり前で、理Ⅰ？ 理Ⅱ？という感じ。環境自体が東大一色でした。学費的にも親にあまり迷惑かかりませんし、どんな勉強をするにも、東大には圧倒的な環境が整っていることが大きな選択要因になりました。理Ⅰを選んだ理由は、入学後の選択肢の広さがあるということです。僕の場合は井本くんのように明確な目的はまだありませんので。

Q :なぜグノーブルを選んだのでしょうか？

緒方：東大法学部の兄が受験のとき中山先生にお世話になっていたのですが、その兄が「素晴らしい先生だよ」と言っていたからです。グノーブルの良さを兄が実証済みだったというところが大きいかと思います。

井本：僕は多人数制というのが嫌だったんです。やはり多人数制の所では僕自身を見てくれないような気がして。名前も知らない生徒として扱われるのはいやだったんです。で、実は僕にも兄がいて、これまた中山先生にお世話になって東大理Ⅰに進学したんです。「少

人数制なら絶対グノーブル！」と、うちの兄もグノーブルを大推薦してくれたわけです。入ってみて驚いたのは、グノーブルの先生が僕たち新入生でも1日目から名前でも呼んでくれたこと。それがすごく嬉しくて、「ここなら絶対間違いない」と思いました。でも当初は成績も悪かったので中山先生のクラスに入れずに「何とか上がろう」と必死に勉強しました。

島田：僕は高校受験でお世話になった塾の先生から中山先生を薦められました。実は、他の塾もいくつか見たのですが、どうもいまひとつ心に響くものがなく、グノーブルに来てみたら印象が全く違いました。教室の雰囲気も締まっているというか、グノーブルでは先生が教室に入ってくるとその瞬間に、もう、全員が「さあ、やるぞ」っていう感じでした。

Q：グノーブルの良さは？

西方：僕の場合英語を長く放置してまして、受験学年になってからやっと真剣に取り組み始め

たんですが、「ためになった」と実感できたのは、グノーブルの先生が熱心に勧める音読です。音声教材も積極的に使って音読するうちに英語に対する感覚が身についてきたというか、まず、英語に対する抵抗感がなくなっていたんです。こうした授業を徹底的に実践する塾というのはグノーブルぐらいしかないんじゃないでしょうか。

島田：英語に関しては西方くんと同感です。それに、毎回添削をしていただけたことも本当にありがたかったです。

それから、僕は数学もグノーブルでしたが、実は一時やめて、東大受験で有名なところに数学を習いに行ってみたんです。同じ学校の人が多くいたので何となくその気になって。そうしたら、授業の雰囲気はまるで違って、あらためてグノーブルの良さがわかって戻りました。さっき井本くんが話していた通り、生徒の人数が多かったり先生と距離感がありすぎると肝心なことを聞こうと思ってもできないですよ。その点、グノーブルは先生が

何を聞いても嫌な顔ひとつせず、丁寧に説明してくれます。生徒の名前を覚えられる人数で授業を行うし、僕たちのことを本当によく見てくれているから、先生が生徒のウイークポイントをよく理解してくれていて頼りになります。

井本：そう、やっぱり先生との距離が近いことはグノーブルの大きな特徴です。先生が僕の理解度や実力をしっかり把握してくれているので安心感があります。ただ逆に「あ、ここ分からない」というところをあえて当ててきたりするんです(笑)。緊張しちゃうんですけど、そうしたことも勉強するにはとても良い環境です。距離感と適度の緊張感ですね。

緒方：特に高1、高2の時に感じたことなんですけどグノーブルで「自学自習」の習慣がつかまりました。授業ももちろん素晴らしいんですけど、グノーブルでは復習ということをすごく推奨していて、自宅での勉強法を指導してもらえました。それに加えて、自分でも進んで家でやろうという気になれました。たとえば、

古文の行村先生の場合、授業が信じられないぐらい楽しいんですけど、それを楽しむためには自分が主体的に勉強に向かうのが前提となっていて、とにかく、高1、高2といった頃から家で勉強する習慣が身に付きました。英語にもそれは言えて、受験学年になる頃までには、勉強を「しなきゃいけない」ではなく「勉強したい」という気持ちに導いてくれる、そんな先生ばかりだったと思います。結局、高1、高2の段階で「勉強って面白い！」と思えていないと、高3になって急にダッシュしても息切れしてしまうと思うんです。

西方：さっき島田くんも言ってたことですが、教室に意欲があふれているというか、周りのレベルが高いというのもグノーブルのいい点だったと思います。周りのレベルが低いとそれが限界点になってしまう。けれどもまわりのレベルが高くて、その人たちがさらに高いところを目指しているので、当然自分もそれに引っ張られていくようなところがあります。ですから「自分よりできるやつはいない」と

感じてしまうような塾はいい塾とは言えない
と思いますし、そういった意味ではグノーブル
には強力な人が大勢いて、自分の限界点も
上がるんです。

緒方：「追いつき追い抜きたい」という競争心は受
験勉強には大切ですよね。

井本：僕は逆に少し圧倒されてました。「上には上
がいる」って。でも、そのプレッシャーを逆
にばねにできるかできないかが勝負かなと思
います。やっぱりまわりの人の存在は大きな
ものがありますし、あのプレッシャーがなけ
れば僕は伸びなかったと思います。

Q : グノーブルの授業がきついと感じたことは？

島田：高1、高2のころは、「この英文はぜんぜん
分からないぞ」と思ってへこんだこともあり
ました。

西方：最後まで感じたのは量の多さです。自分の
英語力が足りなかったというのも一つの理由
だと思いますが、徐々に量が増えていってい
るような… (笑)。で、それに加えて中山先生

は早口。黒板に書かれることだけでなく、おっしゃることも重要なことが多く、それをすべてノートにとりたくて、一苦勞でした。また、帰ってからの語彙や知識面での復習、あと、毎日の音読…。結構大変でしたね。でも、語学を鍛えるには、こういう環境こそ大切だと思いますし、中山先生の授業はやる気が出るんです。

井本：僕も量の多さは感じていました。ましてや自分の成長が教材の量をいつまでたっても逆転できずに、ずっと量が多いと感じていました。でも、教材の内容は本当に良質で、力もつくし、いろんな分野に英語で触れられたし、解説は英文の背景にまで踏み込んでいて面白いので、恵まれていると感じていました。

緒方：僕は高2の頃、お帰り問題がぜんぜんできなくて、さっさと帰って行く人の中で焦って、それがすごく悔しくて…。でも、やっぱりそういう悔しさをばねにできたからこそ実力がついたと思っています。

Q : 勉強以外にも学んだことはありますか？

緒方：設立当初はグノーブルって小さい塾だったわけですよ。それがわずか4年で数ある進学塾を追い抜いて開成の中でもけっこう有名になってきているんです。そういう意味では、一から作ってここまで有名にした中山先生の信念みたいなものは自分でも学びたいと思います。

西方：そう、ここ2年ぐらいで、開成でも爆発的に名前が出るようになりました。

井本：麻布でも高3になって急に通い始めたという友達が増えました。それまで僕一人かなと思っていたら「お前も行ってんの？」みたいな。去年の結果が出て「この塾すごいな」という噂が広まった感じです。合格結果だけでいけばグノーブルより大勢合格している塾はありますが、あれはみんな規模自体が大きい塾ですからね。割合でいえばグノーブルはすごい。そのあたりはみんな感じているんじゃないでしょうか。

島田：僕は高1からなんですけど、そのころはグ

ノーブルと言っても「え、何それ。グローブ？」みたいな感じでしたが、やはり高3になる頃までには「え、キミもグノーブル」みたいになっていましたね。すごい勢いで認知されてきているんじゃないでしょうか。

西方：東大ならグノーブルという気分じゃなく、東大にこだわらずに「英語ならグノーブル」という感じが最近強い気がします。東大をはじめとした一流大学に対応しているだけじゃなくて、「受験英語を超えた英語力が身に付くグノーブル」って感じじゃないでしょうか。

Q：グノーブル数学の評判は？

島田：筑駒の中での評判は、グノーブル＝英語です。個人的には数学も受けていてすごくいい感じだったけど、数学となるとみんな他の塾で満足しているようで。西方くんが言うように「英語ならグノーブル」というイメージが強いんじゃないでしょうか。

緒方：グノーブルの数学は直前講習で取りました。東大理系数学という講座で、大手予備校より

質がいいと思える面白い問題に出会えました。グノーブルは数学のイメージがぜんぜんなかったのですが、実際にとってみて「良かったな」と感じました。

井本：僕も数学とっていました。すごく良かったですよ。先生との距離も近く、添削も一人ひとり丁寧にやっていただけだし。

それと、グノーブルの数学は問題の解き方を教えるのではなくて物の考え方を教えてくれて、とても発展性のある授業をしてくれます。すごくためになりました。でもやっぱり麻布で広がっているのはグノーブル＝英語のイメージですね。

Q：東大を目指す後輩たちにアドバイスを。

井本：モチベーションを保ち続けることってほんとうに難しいことなんで、適度の息抜きは必要だと思います。でも、やっぱりゲームはまずいと思いますけど(笑)。それから受験勉強は復習が大事なので、それを継続できるような自分自身のコントロールを忘れないで欲し

いと思います。

緒方：僕も息抜きは大事だと思います。現役のころはこんを詰めてやりすぎて、寝ている時間以外はずっと勉強、スケジュールもぎっしり組んで狂いなくという感じでしたが、問題数をいくらこなしても東大の問題はできるようにならないと思います。量も絶対的に大事ですが、量重視ではなく質を重視した勉強をすることが大事だと思います。

あと、自分が何のために勉強をしているか、特に理Ⅲを目指す人は考えた方がいいと思います。なぜ理Ⅲなのか、なぜ東大なのか、何のための勉強なのかをしっかりと考えて欲しいと思います。

西方：今、緒方くんが質重視ということを行いました。自分の場合は勉強は絶対量だという思いがずっとあります。僕は中学受験の頃からどんどん量をこなすことで自分を前へ、前へと追い込んでいたんです。質とか言うと「こんだだけ質の良い勉強してるんだから」と言い訳をして自分が逃げちゃうこともあるように

思います。

息抜きというのも、僕は意識して取ってはいなくて、途中で当然モチベーションがきれそうになることもあります。そこをなんとか踏みとどまって勉強に向かう姿勢を保っていく。そんなふうにしてやってきました。僕のようなタイプの人には1度止まってしまうと一気にエンジンが冷えてしまうというか。それに、量をこなすからこそ、自分にあった勉強法が分かり、質の良い勉強になっていくようにも思います。

島田：主体性を持てるようにすることが一番大事だと思います。僕の場合は高校受験のとき、塾から与えられたものをただこなすだけで、基本的にはそれ以外のことはやらない習慣がついていました。それでグローバルに入っても高1、高2くらいまではだらだらと宿題だけやってる感じで…。そんなことをしていたので途中でクラスも落ちてしまったんです。で、高3から「自分の勉強は自分で引き受けよう」という気持ちになってまた伸びました。

要は自分自身がその気になって取り組むことが出来るか否かなのだと実感しています。また今、量とか質とか出ていますが、僕は「やるべきことをやる」ということが何より大事だと思います。まわりを気にしてそわそわと別の問題集に移ったり、勉強のやり方も変えてしまったり…。そういうのは危険です。自分が納得し理解した上で、自分で決めたやるべきことはやりきる。これが何より肝心なことではないでしょうか。

東大合格発表の2日後（2010年3月12日）

グノーブル新宿本館にて